

ふるさと散歩道 第二三八回

間部詮勝の時代(十六)

— 攘夷から倒幕へ —

攘夷の実行

文久三年(一八六三)三月、上洛した十四代将軍徳川家茂は朝廷に対し、「五月十日をもって攘夷を実行する」と約束せられ、その旨を諸藩に通達しました。ただし、幕府は諸外国との戦争は多大な



イギリス軍に占領された下関砲台
(長崎大学付属図書館蔵)

攘夷を推し進める長州藩は京都政変や禁門の変でいったんは失脚しますが、薩摩藩と同盟を結び、逆として幕府の長州征討軍を破り、逆に討幕運動を加速させていきます。

損害を被ることになると伝えており、英・

仏・米・蘭にも攘夷を行う意思がないことを伝えていました。ところが、尊皇攘夷運動の中心となっていた長州藩は、通達どおりの五月十日、関門海峡を通る外国艦船を砲撃したのです(下関事件)。

薩摩藩も、同年七月二日、生麦事件の報復のために鹿児島湾に侵入した英艦隊と交戦しますが、鹿児島城下に大きな被害を出しました。攘夷が不可能なことを認識した薩摩藩は、これ以後、一転してイギリスとの直接貿易により軍備の充実を図っていきます。

暴走する長州藩

一方、あくまで攘夷を実行しようとする長州藩は、京都における政局の主導権を握り、朝廷に多大な発言力を持つようになりました。このため、徳川慶喜や薩

摩藩、京都守護職の会津藩が孝明天皇を動かして攘夷派の公家と長州藩を京都から追放しました(八月十八日の政変)。これに対し、長州藩は元治元年(一八六四)六月、「藩主の冤罪を天皇に訴える」と、京都に軍勢を派遣して御所に侵入、警備の幕府軍と交戦しました(禁門の変)。

長州征討

元治元年七月、禁門の変で御所に発砲した長州藩は「朝敵」と見なされ、幕府は長州征討を決定します。この頃、長州藩は下関事件の報復措置として英・仏・米・蘭の四国艦隊の攻撃を受け、下関砲台が占領されるなど窮地に陥っており、九月の第一次征討では交戦前に恭順の意を示して幕府軍と講和しました。しかし、慶応元年(一八六五)に高杉晋作らがクーデターを起こして長州藩に「倒幕派政権」が樹立されると、大村益次郎らの指導で西洋式軍制を導入し、奇兵隊らの民兵諸隊を組織しました。この動きを見た幕府は第二次征討軍を派兵したのです。

薩長同盟

禁門の変で長州藩と敵対していた薩摩藩は、西郷隆盛や大久保利通らが幕府政

治の限界を唱えるようになり、坂本竜馬・中岡慎太郎の斡旋によって長州藩と軍事同盟を結びます。これにより、第二次長州征討軍には薩摩藩が加わらず、幕府軍の戦略は大きな変更を余儀なくされました。さらに、旧態依然とした幕府軍に対し、西洋式軍備で機動性に優れた長州軍は各所で幕府軍を圧倒したのです。

大政奉還

戦勝によって勢いづいた長州藩・薩摩藩による討幕運動が加速する中、公武合体を主張する土佐藩によって政権の返上が提案され、慶応三年(一八六七)十月、十五代将軍徳川慶喜は徳川幕府を維持するために政治の大権を天皇に返上しました。

(文化課 前田清彦)

【用語解説】

生麦事件→横浜郊外の生麦村で、前薩摩藩主島津久光の行列に騎馬の英国人が乱入し、殺傷された。



15代将軍 徳川慶喜
(福井市立郷土歴史博物館)